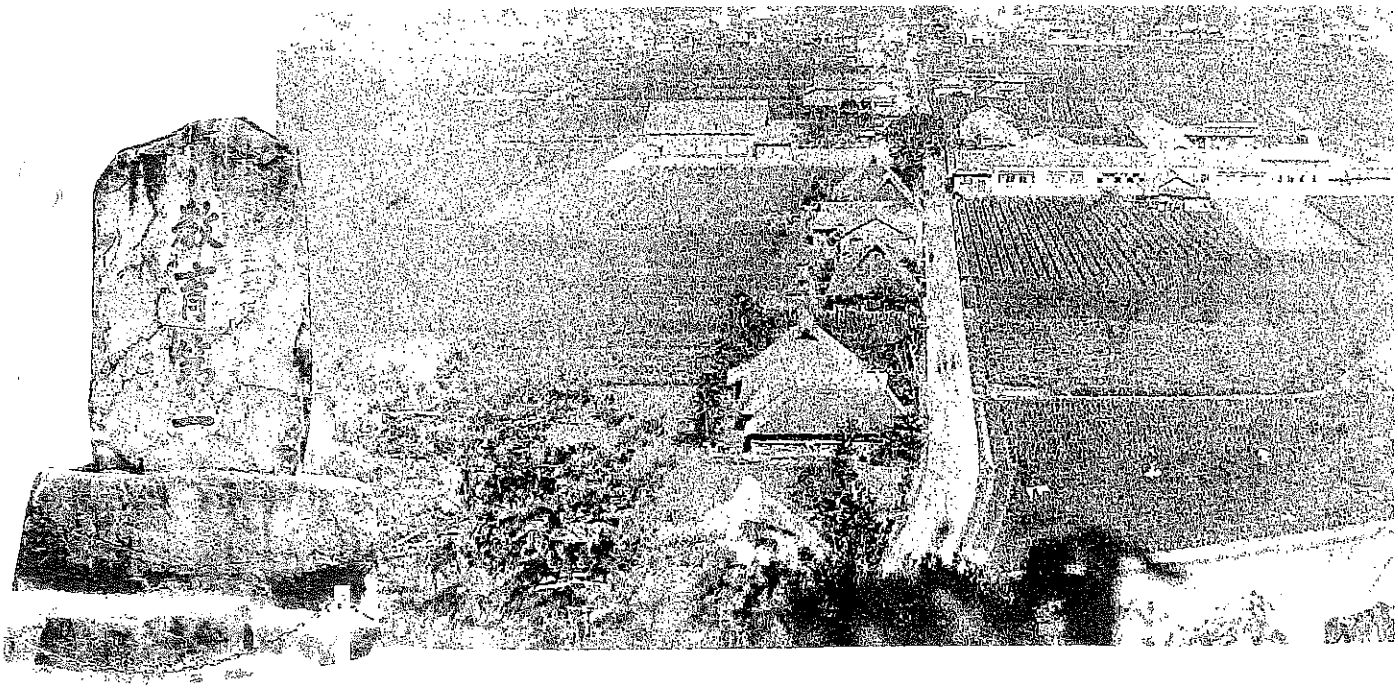
広郷土史研究会

会　報　第１０６号

事務局　呉市広公民館内
〒737-0706 広古新開２丁目 1-4
電話(0823)71-0706　FAX 73-5304
発行　平成 23 年 11 月 12 日
広郷土史研究会編集委員会

第　号
23.11.16
広図書館
受付

全国一の「模範村」表彰百年を経て広村の形成と教訓



写真は広村船津神社山の山頂から広中央部（当時は多賀谷橋交差点）を見たもので
道路は両谷から横路常磐橋に通じる県道。当時の主要道路であった。
道をはさんで中央右側が広尋常高等小学校の校舎で、左側の大きな建物が広公会堂である。
この公会堂前に大正 11 年、学制頒布 50 年を記念して建立された「教育第一」の石碑があった。
これこそ模範村表彰の原動力となった広村初代藤田譲夫村長が村民教化のため行った政策のなかで
村越隆寛広尋常高等小学校校長が実践した広村不文の村是である。
この石碑は昭和 44 年、公会堂の敷地が道路用地になったため広小学校正門奥に移設された。
（写真に大正２年の裏書あり、提供　菊本齊氏　　文責　上河内 良平）

目　　次

第 63 回広地区教育祭
「全国一の『模範村』表彰百年を経て今」によせて　賀谷　剛三・・・・・２頁
明治の広村の歴史　全国一の模範村広村の形成と教訓
ー模範村表彰 100 周年にあたってー　小栗　康治・・・・・３頁
広　村　の　掲　げ　た　教　育　第　一　上河内 良平・・・・２８頁
第 63 回　広地区教育祭歴史講演会　次第　３６頁
古文書部会・例会報告・事務局報告　３７頁

これによると明治12年、石工職人の日当が12銭、それを手伝う土方の日当が10銭であった。(折手峠県道付け替え工事藤田家文書)

この職人の日当を見ると、6銭～30銭の公立小学校の授業料負担がいかほどで有ったか想像できるであろう。

広村の財政破綻

明治17年8月25日夜半からの台風は広村に大災害をもたらした。筆者は今年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災のおり、出張で富山県高岡市にいた。この時、震度3では有ったが数分間つづく長いゆれに取引先のビルの中で不安な思いを体験した。しばらくして自宅から携帯電話があり、東北で震度7の大地震があって、かなり被害が出ているが・・・。と心配する問い合わせがあった。その夜は高岡市内のホテルに泊まったが1時間おきに震度2～3の余震があり。眠れない一夜を過ごした。それでも北陸線は列車が動き、翌日広島へ帰着できた。途中京都から新幹線に乗ると東京方面で地震に遭遇した人がおり、関東で地震に遭遇した恐怖の体験を語っておられた。帰着してからはテレビ画面で東北～関東の被害状況を繰り返し放映していた。まさに町そのものが廃墟になっていた。

ちょうどこれと同じような状況が明治17年の広村台風での高潮被害状況であったと推測される。

広村新開の堤防はことごとく破壊され全新開400町歩が3尺の海水に浸かる。新開の田畑や家屋は総て流され海底と同じ荒れ地の状況になったと記録されている。(藤田家文書)

村ではただちに堤防修復工事に着手したが完成は翌年6月までかかる。(同文書) それでも一度海水に浸かった田畑は塩害によって作付けできず。同18年は広村民が飢えに苦しむ状況に陥る。(同文書) この大災害を記録した石碑「膺懲碑(ようちょうひ)」の碑文は「(前略)　諸墾田　汐満ち堤崩れ路を崩すこと　瞬転の際に在り　(中略)　老若競走し避く　(中略)　前代未聞の地変なり　(後略)」村民以後作物実らず塗炭の苦しみを味わったとある。(注1)

同18年は村税も集まらず村財政は破綻した。戸長、佐々木義三は退任して広村再建を期して有田久が戸長に就任する。翌19年には広村吏員藤田譲夫は下黒瀬村戸長に栄転した。

災害法有 明治13?

この当時の大災害では全国からの支援が得られず。村民の自力で再建しなければならなかった。それは、明治43年に発刊された『自治研究資料・広村視察記集』に明治17年の台風による高潮での堤防損壊の修復費用の内訳の記録から推測できる。記事によると「堤防修復工事(弥生新開・大広新開・多賀谷新開・末広新開・大新開)総延長壱千参百五拾間、この工事費総額壱萬六百拾壱圓

内

金千八百八拾弐圓	県費補助
金参千六百四拾五圓	地主負担
金五千八拾四圓	寄付金　」

とあり、正に公費補助は約10%で、90%は広村の地元で負担している。この負担が広村民に莫大な重荷なったことが理解できる。この災害は広村庄屋、多賀谷家没落の直接原因になった。(注2)